

キュウリウオ

Osmerus eperlanus mordax

キュウリウオ科



キュウリウオ

名前の由来

キュウリのような魚の意。産卵期の本種は青くさい匂いが特に強いからだと考えられる（ぬめりがなくザラつく点もキュウリを連想させるといふ人もいる）。学名の *Osmerus* も「におうもの」の意味である。漢字名：胡瓜魚

特定種

該当なし

形態的特徴

全長15～23cm。口が大きく、かつ下顎が上顎よりも突出していて、その前端に2～4個の鋭い歯がある。尻ビレを立てたとき、その外縁はへこむかほぼ直線的である。青臭い、キュウリのような香りがする。

脂ビレをもつ。脂ビレとは、サケ科、キュウリウオ科《アユの仲間も含む》、熱帯魚のカラシン亜目にのみ見られる、背ビレと尾ビレの間のヒレ。条《スジ》がない。

類似種と見分け方

シシャモ、ワカサギ、イシカリワカサギ。

キュウリウオの口の切れ目は、眼の後端に達するのに対し、他種はそこまで達しない。キュウリウオは歯も鋭い。

シシャモの尻ビレの外縁は丸いのに対し、他種は直線的。イシカリワカサギの脂ビレ（背ビレと尾ビレの間のヒレ）は大きく基底長が眼の直径より長いのに対し、ワカサギの脂ビレは小さく基底長は眼の直径より短い。

また、シシャモには舌の上に黒色素があるが、キュウリウオにはない。



ワカサギ

生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
産卵期<河川>					■	■						
ふ化期<河川>					■	■	■	■				
降海期<河川>					■	■	■	■				
幼魚～成魚<海一沿岸域>	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
遡上・産卵<河川>				■	■	■	■	■				

川の流れて降海

2～3年で成熟

産卵後降海、もしくは死ぬ

一 生

産卵期は4～6月。1ヶ月余りでふ化。ふ化直後直ちに海に下る。

沿岸域で成長し、2～3年で全長15～23cmほどに成長し、

成熟する。産卵期河川に入って遡上、産卵後降海するが河川で死ぬ個体もある。

生息環境・分布

沿岸域。産卵期のみ河川に入る。産卵場所は河口からおよそ1km以上上流の砂礫底。

分布：朝鮮半島からカナダまでの北太平洋、カナダとアメリカ北部の大西洋岸などに分布。

国内では、北海道にのみ生息し、道南の八雲付近から道東にかけて、太平洋岸と噴火湾、オホーツク海沿岸に分布する。

十勝地方では、十勝川や浦幌十勝川など、海に直接注ぐ河川の河口付近～下流域に生息する。

食 性

エビや動物プランクトン、小型のイカなど。

繁殖生態

産卵期は4月下旬～5月下旬ころで砂礫（砂を含む2～10cm）のある河川下流域にのぼって産卵する。遡上は夕暮れ時から行なわれ、夜半にかけて産卵する。

産卵後降海するが、河川で死ぬ個体もある。

卵は粘着卵で砂礫にしっかりと付着する。卵径は1mm前後

で成熟した体長によって異なるが、産卵数は5万粒から10万粒ほどである。水温11℃で19日程度でふ化するという。

他生物との関わり

不明。

興味深い話

■味は淡泊で、普通はなま干しか干魚にして利用される。新鮮なものを2～3日干して食べると特にうまい。

■キュウリウオ科の魚（シシャモ・ワカサギ・アユなど）は皆、キュウリのにおいがするが、中でもこのキュウリウオが最もそのにおいの強い魚であるようだという。

■北アメリカ東部には一生淡水で暮らすものも各地にいて、それが五大湖に移植されて定着しているという。

■十勝地方のアイヌ語名は不明。他地方のアイヌ語では「ヌイラ（強いにおい）」、「フラ・ルイ（においが強い）」などと呼ばれる。

配慮事項

産卵場所として砂礫底が必要。

降海・遡上をするので、海・川の行き来ができることが必要。遊泳力、ジャンプ力は、アユなどと比較すると弱い（妹尾優二）。

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）
草花

（外来種）
草花

哺乳類

（水辺）
鳥類

（草原・樹林）
鳥類

参考文献

「北海道の淡水魚」稗田一俊、北海道新聞社 1984
「検索入門 川と湖の魚②」川那部浩哉・水野信彦 保育社 1990
「山溪カラー名鑑 日本の淡水魚」川那部浩哉・水野信彦 編・監修、山と溪谷社 1989
「日本動物大百科 第6巻 魚類」日高敏隆 監修、平凡社、1998
「日本産 魚類検索－全種の同定－」中坊徹次 編、東海大学出版会 1993

「新 北のさかなたち」上田吉幸・前田圭司 他編 北海道新聞社 2003

「知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社、1976

★ 妹尾優二：(株)エコテック、流域生態研究所